【2015年10月27日】

スポーツの秋

みなさん、こんにちは。
メッセージの更新が遅くなり、申し訳ありません。

秋晴れが続いています。暑さが一段落した感じで、とても過ごしやすい毎日です。一年中で最もさわやかな季節と感じ、私は好きな季節です。昔から「スポーツ の秋」や「食欲の秋」といわれます。秋は〇〇の秋と様々なフレーズがあり、由来はどこからなのだろうかと思っていました。地方への出張の際、移動中に読んだ新聞に「スポーツの秋」の由来が書かれていましたので紹介します。

コモンズセンターから見える秋空と紅葉

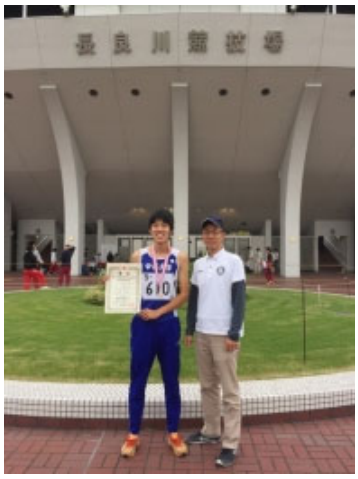
スポーツの秋の由来は、昭和2年（1927年）9月25日の『朝日新聞』で「スポーツの秋」という見出しが使われたそうです。その後、1964年の10月10日に東京オリンピックが開催され、日本中がスポーツで盛り上がり、これをきっかけに10月10日は「体育の日」と制定され（現在は10月第2月曜日）、このことから、「東京オリンピックのあった秋＝体育の日＝スポーツの秋」と、スポーツを振興するようになったそうです。（諸説存在する様ですので、定かではありません）

さて、今回は「スポーツ」について書きたいと思います。記憶にも新しい、ラグビーのワールドカップイングランド大会で、日本代表が過去2度の優勝を誇る南アフリカから大金星を挙げました。今回の勝利は、挑戦者の立場にいる人たちに勇気を与えてくれた気がします。エディー・ジョーンズヘッドコーチは、「日本人は忍耐強く、我慢強い。いい試合ができると思います」と会見で述べています。さらに、「世界を一度だけ驚かせるために、ここに来たわけではない。決勝トーナメントに進出すること、今大会で最も印象的なチームになることが目標です。いい方向に進んでいます」と続けています。五郎丸歩選手は「ラグビーに奇跡や偶然はありません。必然です」と言っていましたが、今回の勝ちは、それだけの緻密でハードなトレーニングをしてきたからこそで、選手にすれば「奇跡」ではなく「練習通りできたから勝てた」と感じ、選手達の達成感がメディアを通して感じることができました。

先日、私の研究室に所属する学生が出場するリーグ戦があったため、応援に行ってきました。この日は午前中に硬式野球、午後からサッカーと、別の意味でスポーツの秋を感じる事もできました。ちなみに前の週はハンドボール、陸上競技と、スポーツを満喫しています。

4年生の秋になり、大学での競技生活が終わろうとしているこの時。アスリート本人にしかわかりえない苦悩とその瞬間の判断を応援席で感じ、その現場に居られる事を嬉しく思いました。私は日頃から“学部学科での学び”と“クラブ活動でのパフォーマンス”の両立を軸として学生指導をしています。これは私の場合、勉強も部活も頑張れ！と言うことではありません。「学び」を極めるには、「スポーツ」によって培われる健全な心と体が必要であり、「スポーツ」を極めるには、「学び」によって培われる論理的思考が必要だと思っています。“学び”と“スポーツ”を複雑に絡め、人間を成長させて行ってもらいたいと思い、毎日本気で努力する学生たちをこれからも可能な限り応援して行きたいと考えています。

硬式野球部白石君：最終カードでホームランを打ってくれました。



陸上競技部松林君：東海学生陸上競技秋季選手権大会3000m障害優勝。

松林君の表彰式の様子

最後に、10月22日より第15回全国障害者スポーツ大会に愛知県選手団の陸上競技役員（チーフコーチ）として参加して来ました。全国障害者スポーツ大会とは、障害のある選手が、競技等を通じ、スポーツの楽しさを体験するとともに、国民の障害に対する理解を深め、障害者の社会参加の推進に寄与することを目的とした障害者スポーツの全国的な祭典です。オリンピック終了後に開催されるパラリンピックのように、毎年、国民体育大会終了後に開催されています。今年は和歌山県で開催されました。5泊6日の遠征で肉体的には疲労困憊でしたが、選手の一生懸命な姿とスタッフ陣のチームワークの結集により、多くの足跡と物語を刻み、何より自身のこころの充電ができました。

愛知県選手団　加納海人選手（100m優勝）

人は何か秀でているのが素晴らしいのではなく、どう努力したかとその努力の結果が素晴らしいのだと思います。“一生懸命になれる“それだけでも価値あることなのかも知れません。この努力や一生懸命な気持ちとその結果は、何ものにも変えがたい崇高なものだと思います。スポーツに限らず、“一生懸命になれる“ものに注力して欲しいと思っています。

コモンズセンター長　伊藤　守弘